

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第63号

平成30年2月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

文化6年、小楠公墓所敷地内に正行顕彰碑建立

正四位下檢非違使兼河内守楠公碑 1行目

＝ 公諱は正行、帯刀左衛門尉と称せり 2行目 ＝

1967 四條畷町勢要覧に載る正四位下の文字

扇谷は、楠正行が正四位に叙されていることを知らなかったため、上北山村に正行を主神とする四位殿神社があることを知り、驚いた。また、正行が正四位下に叙されていたことは、日本史人名辞典にも記されており、史料的にも実証された。

そこで、正行の眠る小楠公墓所や正行を祀る四條畷神社を有するわがまち四條畷にも、何か正四位下に叙されていたことを示す史料がないものかと思ひめぐらせた。

そして、今年の正月、手元にある史料等を思ひめぐらし、かつて市勢要覧に歴史年表が載っていたことを思い出し、手元にある要覧を一冊ずつ詳細に見直すことにした。

その一冊目、昭和42年発行の「四條畷町勢要覧 1967年版」をめくっていくと、巻末に載る「歴史年表」に次の一文を発見したのである。

— 文化6年(1809)、小楠公墓所境内に「正四位下檢非兼河内守」の楠公碑建設、高さ6尺、幅3尺四方、2千余字の碑文を刻み、現在樟樹の南にあり

大阪府全志、四條畷市史にも

見つけた。たった3行の文章であるが、町勢要覧に載る以上、他の文献等にも記載があるのではないかと、四

條畷図書館の永野館長に協力を要請すると、実にその日のうちに2冊の書籍を示してくれたのである。「大阪府全志巻の四」と「北河内史蹟史話」の2冊である。

大阪府全志の第二章河内國第三節北河内郡甲可村の「楠正行の墓」の項に次の件があった。

— 文化6年3月、松生文齡なる者来りて、更に一碑を建設せり、碑は高さ6尺2寸、幅3尺四面にして、正四位下檢非違使河内守楠氏碑と題し、四面に碑文を刻せり。碑文は村瀬栲亭の撰に成り、字数実に2千余字を算し、当時彫刻料は一字毎に金壹朱を要せしと伝ふれば、その巨資を投じたるを知るべし。同時に非常の篤志家なるを想はしむるも、如何なる関係のありてを建てたるかは、前者と共に詳ならず。

また、北河内史蹟史話の甲可村の「小楠公墓地」の項には、次の件があった。

— 文化6年9月に大阪高麗橋5丁目の松生文齡という人が、境内に正四位下檢非違使兼河内守楠公碑と題して花崗岩質位牌形高6尺余り幅3尺四方のものを境内に建てた。今樟樹の南にあるのがそれであって、一字に一朱を要したという2千有余文字の撰文が四方に刻まれてある。

そして、四條畷市史第一巻第II部「各論」第三編「歴史」第一章「四條畷合戦と小楠公社」第二節「小楠公墓地と四條畷神社」二「小楠公墓所」の項に、大阪府全志と北河内史蹟史話とはほぼ同様の件が載っている。



そして、四條畷市史によると、江戸時代後期の楠塚は、大いなる楠の木と、それに胎蔵されるとの伝承小碑、1メートル余りの天正12年建立石碑、文化6年の顕彰碑、そしてその敷地は東西7間2尺（13m30cm）、南北6間（11m）の墓所であったと記されている。

今も、楠樹の南に静かに立つ

しかし、何度も足を運んだ小楠公墓所の境内に、この顕彰碑を見た記憶がない。

明治に入り、小楠公社建立の動きに呼応して、敷地拡張の動きが起こり、明治8年、東西31間、南北34間に拡張営繕された。そして、翌明治9年12月15日、正行が従三位に追贈され、それを機に、一大碑を建設することとなり、生駒山竜間から切り出された巨石碑が明治10年12月に竣工し、翌11年1月に建碑式を挙行することとなった。

この碑は、大久保利通の揮毫で「増従三位楠正行朝臣墓」と刻まれた。

果たして、もしかしたら、正四位下の碑のある敷地に従三位の巨石碑が建つことになり、文化6年建立の楠公碑はどこかに移されたものではないか、との思いが。

扇谷は、小楠公墓所を管理する四條畷神社に、南井權禰宜を訪ねた。

拓本は四條畷神社の提供

扇谷が、京都大学貴重資料デジタルアーカイブスに公開されていた「正四位下檢非違使兼河内守楠公（正行）碑4巻」のプリントデータをお見せして、「この碑の、今の所在をご存じありませんか」と尋ねた。

「扇谷さん。この拓本は、3日もかかって取ったもので、私が立ち会いました。玉垣の中に建っているので、管理上、私は何もすることはなかったのですが、見守らせていただいたことを覚えています。そして、この碑は今も楠樹のそばに立っていますよ。」

「ええー！」と、絶句。

その足で、小楠公墓所を訪れ、玉垣の間から墓所内をじっくりと観察すると、何と、今まで見落としていたこの楠公碑が建っていたのである。

刻まれた2千余字の文字は離れていて判読不能だったが、帰宅し、デジタルカメラの映像を拡大してみると、東面に「正四位下檢非違使兼河内守楠公碑」の文字がくっきりと見えた。

京都大学デジタルアーカイブは、掛軸拓本（1面掲載）も公開している。2000余字の文字もしっかりと判読できる。

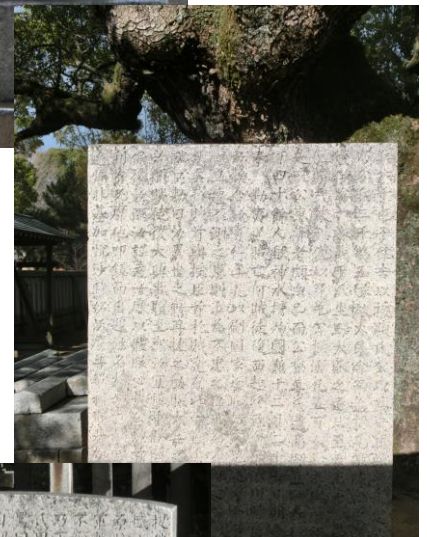


→東側正面より遠望／鳥居の中心、灯籠の向こうに建つ

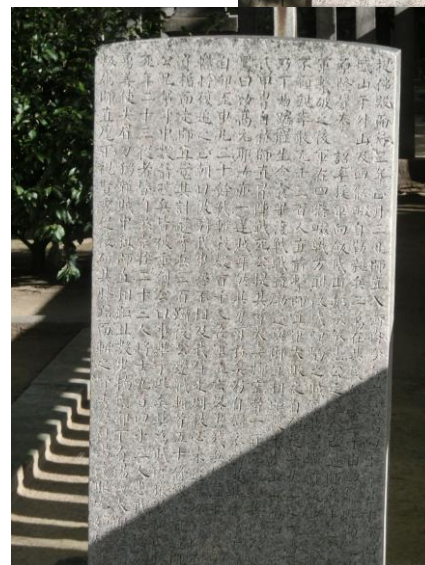


←東面／1行目に「正四位下檢非違使兼河内守楠公碑」とある

→南面



←西面



↑西側より全景／楠木の大樹に寄り添うように建つ。玉垣とほぼ同じ高さの為、外からは丁度死角になっていた。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）